

平成22年 6月16日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2009

課題番号：18510215

研究課題名（和文） 韓国における高齢期ライフスタイルの変容

研究課題名（英文） Changing Life Style of Elderly People in South Korea

研究代表者

小林 和美（KOBAYASHI KAZUMI）

大阪教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：90273804

研究成果の概要（和文）：韓国社会における高齢期ライフスタイルの変容の様相について、実証的に研究した。現地調査は、京畿道城南市（首都圏）、大田広域市、忠清南道の農村地域で実施した。全体的動向としては、晩年型同居の増加、農村部での三世代家族形成の困難、経済力によるライフスタイルの選択肢の広狭、子どもたちによる親の扶養責任の共有傾向などがみられた。日本との比較からは、別居子や近隣との盛んな交流、高い就労率（とくに農村部）と子どもからの経済的援助などの特徴が明らかになった。

研究成果の概要（英文）： I studied the recent situation of changing lifestyles of elderly people in South Korean society. The field research was held in Seongnam City Geonggi-do (Seoul Metropolitan area), Daejeon Metropolitan City and the farm village area of Chungcheongnam-do. I found the general trends as follows; 1) increase of the lifestyle of elderly parents joining their grown children's families in later years 2) difficulty of forming the three-generation family in the countryside 3) varieties of living alternatives by economical condition 4) tendency to share the responsibility of supporting one's parents among all children, etc. Compared with the Japanese lifestyles, following characteristics became clear such as 1) frequent contacts with children living separately and with neighbors 2) high working rate especially in village areas and economical support from children, etc.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,600,000	0	1,600,000
2007年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2008年度	70,539	21,161	91,700
2009年度	729,461	218,838	948,299
年度			
総計	3,600,000	599,999	4,199,999

研究分野：複合新領域

科研費の分科・細目：地域研究・地域研究

キーワード：高齢化、韓国、ライフスタイル、高齢者

1. 研究開始当初の背景

(1) アジア地域では今後、高齢化の急速な進展が予測されているが、なかでも韓国は、シンガポールと並んで、アジア地域最速の水準で高齢化が進展すると予測されている。2003年現在の韓国の高齢化率(65歳以上人口が全人口に占める比率)は8.3%ですでに「高齢化社会」になっており、2017年には高齢化率が14%に達し「高齢社会」を迎えると予測されている。これは、日本が経験した高齢化の進展速度を上回るものである。2002年の韓国の合計特殊出生率は1.17で、日本の1.29を下回っており、少子高齢化の進展にたいする危機感は日本に劣らない。また、韓国では、経済の高度成長の過程で都市部に人口が激しく集中し、都市部に暮らす子世帯と農村部に暮らす親世帯という世代間の地域的分居の構図が構成され、これが高齢者の扶養や介護をめぐる家族関係や福祉サービスのあり方に多大な影響を及ぼすものとなっている。急速な経済成長による社会変容と先進諸国および日本でも先例がないほどの高齢化を経験することになる韓国社会に暮らす人々が、これにどのように対応していくのかを調査・研究することは、今後、急速に高齢化が進む他のアジア地域の研究にも資するところが大きいと思われる。

(2) 韓国国内では、政府関係機関や研究者によって、高齢者の生活や意識にかんする大規模な調査票調査が行われてきており、他のアジア諸国に比べるとこれらのデータは豊富である。これまで日本においてなされてきた韓国における高齢者扶養をめぐる諸問題についての研究は、主としてこうした全国的統計データの分析をもとにしたものであった。しかし、外国研究として韓国研究をおこなうさいには、質的データの収集と分析が必要である。統計データを解釈するうえでも、高齢者自身やその家族、地域社会、行政関係者らの行動の実態と意識および相互関係を把握するうえでも、インタビューや観察による個々の事例に踏み込んだデータの収集と分析が必要である。

(3) インタビューなどによって得た質的データに基づく研究はまだごくわずかであり、調査対象地は韓国東南部の慶尚道地域に集中している。韓国国内の全体的動向および各地域の特色、首都圏と地方との差異などについて考察するためには、ソウル首都圏や西部地域などでの現地調査が必要である。

(4) 近年の韓国では、高齢者の間に自立志向が高まり、息子がいても健康なうちは夫婦だけで暮らしたり、シルバータウンなどと呼ばれる施設に入居する例がみられるようになってきている。こうした動きは「ミドルクラス」が多く住むソウル郊外の新興住宅地から拡大しているようである。同時に、敬老堂や公

園などに高齢者が集い、花札やユンノリ、将棋などをする姿もみられる。高齢者たちの日常生活の過ごし方の変容/継続とその多様性に目を向ける必要がある。

(5) アジアにおける育児援助ネットワークについては地域別パターンの類型化がおこなわれ、それぞれの社会の特徴を位置づけ整理する作業がなされているが、高齢者扶養については地域別の類型化をおこなうまでには至っていない。高齢者の日常生活における家族・親族ネットワーク、家事労働者、施設利用などの実態を現地調査に基づいて明らかにすることにより、アジア諸社会間の比較研究に寄与することができる。

2. 研究の目的

本研究は、韓国社会における高齢期のライフスタイルの変容の動向を、アジア諸社会の動向のなかに位置づけることをめざすものである。本研究課題では、韓国ソウル首都圏および大田広域市における現地調査を通して、高齢者と家族・地域・社会福祉などとの間の関係のあり方の現況とその変容の方向を明らかにすることが具体的な課題となる。

3. 研究の方法

(1) 調査研究方法の検討

家族社会学、社会福祉学分野における韓国の専門研究者へのヒアリングをおこない、質的調査の重要性、高齢者の多様性など、調査研究上の留意点について助言を受けた。

(2) 現地調査によるデータ収集

① 概況調査

都市高齢者のライフスタイルの新しい動向については、首都圏では京畿道城南市盆唐区の盆唐新都市、大田広域市では儒城区大徳研究団地近郊地域において調査をおこなった。区庁(区役所)の高齢者福祉担当部署、地域の老人福祉館や敬老堂などの高齢者の生活と関連の深い施設等を訪問し、担当職員および利用者から話をきいた。民間企業による高齢者向け居住施設(高級老人ホームなど)の訪問、住民自治センター・図書館・百貨店等が提供する文化講座の利用状況調査、教会の高齢者向け講座の参与観察、早朝の公園でのサークル活動の観察などもおこなった。

農村部については、忠清南道イェサン郡デフン面、コンジュ市ケリャン面・サゴク面の面事務所および面内の集落を訪問し、担当職員および地域住民に話をきいた。

② 都市高齢者のライフスタイル調査

大田広域市の儒城区総合福祉センターを拠点に、この地域に居住する高齢者に対し、家族関係・日常生活・社会的支援の実態およびこれらに対する意識についてのインタビ

ュー調査をおこなった。

また、総合福祉センター、デイケアサービス、低所得者向けの療養院、敬老堂など、インタビュー調査で調査対象者が言及した高齢者関連施設やサービスについて、参与観察、観察、職員へのヒアリングなどの方法で調査をおこなった。

③農村高齢者のライフスタイル調査

忠清南道の4つの集落（コンジュ市ウソン面ハンチョン里、ケリョン市オムサ面ヒャンハン里、イェサン郡デフン面トンソ里、ソサン市コブク面チョロク里）において、行政関係者、里長、老人会長などへのヒアリングをおこなった。ハンチョン里とヒャンハン里では、敬老堂や個人のお宅を訪問して当該集落で暮らす高齢者にたいし、家族関係・日常生活・社会的支援の実態およびこれらに対する意識についてのインタビュー調査をおこなった。



(3) 関連資料の収集とデータ分析

現地調査で収集したデータの位置づけについて検討するため、関連する新聞・雑誌記事、韓国およびアジア地域の高齢者・家族・社会福祉サービス関連図書・論文等を収集し、韓国およびアジア地域における高齢期ライフスタイルの動向について検討した。また、「生活時間調査」、「社会統計調査」などの統計資料を用いて日韓の比較分析をおこない、日韓の高齢者のライフスタイルの特徴を明らかにした。

4. 研究成果

(1) 全体的動向

韓国の伝統家族においては長男がチブ（家）を継承する直系家族が規範とされ、老親の扶養は長男が同居しつつおこなうのが一般的であった。急激な経済成長を経るなかで家族形態が大きく変容した現在では、理念としては家族の扶養責任が強調されながらも、現実には家族の扶養機能が急速に低下しつつある。韓国における高齢期ライフスタイルの変容の全体的動向について、全国規模の統計データと現地調査で得たデータをもとに検討した結果、以下のような動向を見出すことができた。

① 「晩年型同居（途中同居）」の増加：元気なうちは子世代と別居し、健康に不安が生じたりひとり暮らしになったら同居に移行する「晩年型同居（途中同居）」が広くみられるようになっており、現在、三世代家族として暮らしている世帯にはこの形をとったものが少なくない。

② 農村部での三世代家族形成の困難：経済成長の過程で農村から都市への激しい人口流出が起こった韓国では、若い世代が流出してしまった農村部よりも、むしろ若い世代がいる都市部のほうで三世代家族の形成が容易になっている。

③ 経済力によるライフスタイルをめぐる選択肢の広狭：経済力のある高齢者のなかには、「シルバータウン」などの施設を利用し、生涯に渡って子どもたちと自立した関係を築こうとする人々も現れており、老後の生活様式についての選択肢の広がりが見られるが、経済力がなく頼れる子どももいない高齢者の場合には、公的扶助や社会福祉に頼らざるを得ない。

④ 子どもたちによる親の扶養責任の共有傾向：親の扶養責任は、長男を中心に次三男や娘たちにも共有されるようになってきているが、娘との同居は親の側の抵抗感が大きく、難しいようである。

(2) 生活時間の特徴

韓国の統計庁による生活時間調査データと日本の総務省統計局による社会生活基本調査データを用いて10歳以上（調査対象者全体）および65歳以上（高齢者）の人々の行動の種類別総平均時間の日韓比較をおこなった。その結果明らかになった韓国の高齢者の生活時間配分のおもな特徴は、以下のとおりである。

① 全体的特徴：韓国の高齢者は、日本の高齢者に比べ、仕事と学習の時間はほとんどかわらないが、個人的ケアと家事と家族のケアに配分する時間が短く、自由時間と移動の時間が長い。自由時間については日本の高齢者に比べて男女差が少なく、韓国の女性高齢者は日本の女性高齢者に比べて長い自由時間を確保している。

② 個人的ケア時間の特徴：男女ともに食事時間が大幅に短く、また男性の睡眠時間が短い。

③ 家事と家族のケア時間の特徴：家事の時間は男女とも大幅に短い、家族のケアの時間は若干長くなっている。

④ 自由時間の特徴：交際の時間が男女とも大幅に長く、家族・親戚以外の人々との交際に、交際時間の大部分があてられており、電話による交際時間も日本より長い。休養・くつろぎの時間は男女とも長く、宗教活動の時間は女性で長い。自由時間のほぼ半分を占めるテレビ視聴時間は日本の高齢者とまったく同じであるが、新聞・雑誌の講読時間は短い。スポーツ・野外レジャー活動の時間はあまりかわらず、ウォーキングや散歩などが多くの時間を占めている点でも共通している。趣味・余暇活動の時間もほぼ同じだが、韓国では、遊び・ギャンブルが多くの時間を占めている。社会参加・ボランティア活動、学習、教養・娯楽が占める時間は日韓ともに少ないが、韓国のほうが若干短い。

(3)農村部の高齢者の生活の特徴

全国規模の統計データと忠清南道の2つの村落（ケリョン市オムサ面ヒャンハン里、コンジュ市ウソン面ハンチョン里）での現地調査で得たデータをもとに、韓国農村における高齢者の生活の特徴について日本との比較から検討した結果、以下のような特徴が明らかになった。

① 低い子どもとの同居率：韓国では農村部の高齢化が極端に進んでおり、都市部に比べて子どもとの同居が難しい。

② 別居子や近隣との盛んな交流：家族行事の多い韓国では、祖先祭祀や親の誕生日など機会あるごとに家族が集まるため、別居の子どもとの交流は頻繁である。また、韓国の農村には、マウル会館（敬老堂）や大きな木の下など、高齢者たちが日常的に集う場所があり、ほぼ毎日、一日中、近隣や友人とともに過ごす高齢者はめずらしくない。マウル会館での近隣との交流や共同食事など、地域社会における自発的な助け合いが、一人暮らしの高齢者が農村に住み続けるための大きな助けになっており、深刻な高齢化のなかで高齢者たちの生活を支えている。

③ 高い就労率と子どもからの経済的援助：農村の高齢者の大部分は農作業に従事しており、おもに補助労働に従事している。公的年金だけで生計を維持するのは難しいため、マウル内で賃金労働をしたり、子どもたちからの支援を受けたりしている。

④ 家族による介護への期待と施設やヘルパー利用の忌避：子どもと同居していない高齢者たちは、農村に住み続けることを希望しているが、健康状態が悪化したら都市に住む

子どものところへ行かざるを得ない状況である。在宅介護サービスは整備されつつあるが、利用者は限定的である。入所施設の利用者も、ごくわずかである。

(4)資料・報告書の作成

① 「高齢者の新しい動向にかんする新聞・雑誌記事」：「ニューシルバー」、インターネットの利用、老人総合福祉館での活動、海外再就職、海外移住、高級シルバータウンの利用など、韓国の高齢者の新しい動向を知ることができる新聞・雑誌記事を選んで訳出し、資料集を作成した。

② 「都市高齢者へのインタビュー記録：家族・日常生活・社会サービスの利用状況」：2007年8月に大田広域市儒城区でおこなった高齢者へのインタビュー記録を資料としてまとめた。

③ 本研究課題の成果（論文・資料等）を収録した研究成果報告書（A4版、134頁）を作成した。

(5)研究成果の位置づけと今後の展望

本研究課題の成果はすべて、韓国社会における高齢期のライフスタイルの変容の動向をアジア諸社会の動向のなかに位置づけようという展望のもとに成ったものである。アジアの他の社会と比較しながら、韓国社会の特徴を描き出すようつとめた。これらの研究成果は、韓国の地域研究であるだけでなく、近年、国内外で急速な進展をみせているアジア家族の社会的ネットワークの比較研究の一部をなすものでもある。アジア諸国の研究者が研究成果を利用できるよう、全体的動向については英語、農村部の動向については韓国語の論文も執筆し、研究成果報告書（冊子）に収録した。

今後は、日本以外の社会との比較の視点を強化し、アジア諸社会の動向とそれぞれの特徴をより広くとらえられるようにしたい。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

① Kazumi Kobayashi, “The Changing Lifestyle of Elderly People in South Korea,” *Journal of Intimate and Public Spheres*, 査読有、No. 0、2010（印刷中）

② 小林和美、韓国の高齢者の生活時間—生活時間調査データの日韓比較から—、大阪教育大学紀要第Ⅱ部門、査読無、第58巻第2号、2010、1-15、

<http://ir.lib.osaka-kyoiku.ac.jp/dspace/handle/123456789/15140>

〔学会発表〕（計 1 件）

- ① 小林和美、韓国における高齢者の生活、社会政策学会第 115 回大会、2007 年 10 月 13 日、龍谷大学深草キャンパス

〔図書〕（計 1 件）

- ① 落合恵美子、山根真理、宮坂靖子、小林和美、洪上旭ほか、勁草書房、アジアの家族とジェンダー、2007、70-87

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小林 和美 (KOBAYASHI KAZUMI)
大阪教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：90273804